

Title	外国語教育におけるドイツユラントフンクの有効性
Author(s)	中川, 裕之
Citation	外国語教育のフロンティア. 2018, 1, p. 135-147
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/69785">https://doi.org/10.18910/69785</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 外国語教育におけるドイツチュラントフUNKの有用性

The usefulness of “Deutschlandfunk” in foreign language education

中川 裕之

## 要約

外国語教育には二つの目的がある。第一に、平和で円滑なコミュニケーションの実現、第二に、悪意のあるコミュニケーションへの対処である。前者は多言語・多文化主義に基づく多様な世界の尊重に通じ、後者は権威主義的パーソナリティによる他者や弱者—たとえばユダヤ人—の排除といった単一化に通じる。従来の外国語教育では前者を重視して語学能力の向上に努めてきた。だがそれだけでは後者のような陰湿なコミュニケーションには対応できない。そこでハーバーマスが重視したのが言語学の語用論的能力である。つまり、文字上の表面的な内容伝達が当該コミュニケーションの主眼ではなく、後者のようなコミュニケーション—むしろ聞き手を窮地に追い込もうとする話し手の邪悪な思惑や嫌がらせを目的とした—を看破しなければならない。さらに、寛容で強靱な人文知を身につけるためにはたとえばドイツチュラントフUNKのような機会を活用し、グローバル化に翻弄される世界の動向を把握しなければならないことを、具体例を用いながら実証する。

キーワード:外国語教育、語用論、多様性、単一性、ユダヤ人、人種差別、権威主義的パーソナリティ、ユダヤ人、アドルノ、フロム、サルトル、ボーヴォワール、ハーバーマス、アーレント

## 1. はじめに — 外国語教育の二つの目的

学生に外国語教育の目的は何かと尋ねると、平和的でコンフリクトのない円滑な意思疎通（コミュニケーション）を図り、異文化間のギャップを埋めること、といった答えがしばしば返ってくる。この見解はむしろ間違っているわけではないものの、外国語教育の目的は、はたしてこれに尽きるのだろうか。

基本的な言語学習の行く先には、さまざまな戦略—高度で狡猾なやりとり—が手ぐすね引いて待ち構える。自分のみが利益を得、相手を陥れようとする策略や陰謀、陰湿かつ好戦的で悪意に満ちたコミュニケーション、これもまた実社会におけるコミュニケーションの重要な一側面に他ならない。この実情に正しく対応せねば世界を生き抜くことは難しい。さまざまな言語的戦略に屈せぬ知力と耐力を学生たちは身につけねばならないし、われわれ教員は身につけさせることが必要だ。これもまた、もう一つの重要な外国語学習の

目的であるに違いない。

### 1.1 多様性と単一性

あらゆる分野でグローバル化が席卷している。外国語教育・研究の現場にも有形無形の影響が及んでいる。グローバル化の進展は、経済性の原理、という単一性に基づいた世界同時進行中のとてつもなく強力な潮流である。ところが世界は本質的に多様である、あるいは混沌である。これが現実であって世界は総合体に他ならない。多様性に対立する概念は単一性である。にもかかわらず単一性へ向かおうとすれば、その先には矛盾と破綻が待ち構える。

ここでまず次のように仮定してみよう。単一的でモノトーンな世界を構築しようと異質な他者を排除して、たとえば大文化や大言語だけで済ませようとしたらどうなるだろうか。<sup>1)</sup>これは単一価値や単一基準への志向である。たとえば昨今の難民問題、移民や弱者、外国人の排斥、アメリカ・シャーロットビルでの白人至上主義に象徴される事件もこの流れに通じるものであるだろう。過去において、単一的な世界を作ろうとした人類の試みは、ナチス・ドイツの例を筆頭に失敗に終わったはずである。だが二十一世紀の現在、はたして世界はどのようなのだろうか。

### 1.2 「ユダヤ人」と「人種差別」

「ユダヤ人とは、反ユダヤ主義者がユダヤ人と名指す人のことである」(ヴィヴィオルカ 2009: 171)、「反ユダヤ主義者が、ユダヤ人を作るのである (Der Antisemit macht den Juden.)」と言ったのはジャン＝ポール・サルトル (1956: 82) である。<sup>2)</sup>言い換えれば「ユダヤ人」とは、多くの人々が、差別・排除のターゲットとみなした人々ということになる。あるいは「ユダヤ人」とは、反ユダヤ主義者が社会の諸矛盾を押しつけるためのスケープゴートとして作り出した像であるとも言えるだろう。だとすれば、反ユダヤ主義、ユダヤ人差別は「人種差別 (フランス語: racisme, ドイツ語: Rassismus, 英語: racism)」の一類型にほかならない。メンミによる「人種差別」の定義を二つここに提示する<sup>3)</sup>:「人種差別は、異質性嫌悪 (ドイツ語: Heterophobie, 英語: heterophobia) に発する観念上の、多かれ少なかれ虚構の生成物である。」(メンミ 1996: 3)、「人種差別とは、現実の、あるいは架空の差異に、一般的、決定的な価値づけをすることであり、この価値づけは、告発者が自分の攻撃を正当化するために、被害者を犠牲にして、自分の利益のために行うものである。」(メンミ 1996: 98) この秀逸な定義は「権威主義的パーソナリティ」(次節参照)ともきわめて関連性が高い。反ユダヤ主義は異文化問題の中でも非常に歴史ある深刻なものの一つであり、今日の多文化主義の問題も、欧米におけるユダヤ人問題に通じる。

### 1.3 権威主義的パーソナリティ

ユダヤ人のエーリヒ・フロム<sup>4)</sup>とテオドル・アドルノ<sup>5)</sup>が「権威主義的パーソナリティ (ドイツ語: *Autoritäre Persönlichkeit*, 英語: *Authoritarian personality*)」(アドルノ 1980) という社会的性格に着目した。「自由を得たいという内的な欲望のほかに、おそらく服従を求める本能的な要求がありはしないだろうか。もしそういうものがないとしたら、指導者への服従が今日あれほどまでに多くのひとびとを引きつけていることを、どのように説明したらよいであろうか。(…) 服従することのうちに、一つのかくされた満足があるのだろうか。」(フロム 1952: 13f.)。概略すれば「権威主義的パーソナリティ」とは、自分より強い者や権威には平身低頭、追従し、嫌らしくすり寄り一方で、自分よりも弱いと判断した者や少数派 (マイノリティ) に対しては、陰湿に攻撃し—野獸的本能のなせるわざであろうか—嫌がらせ (ハラスメント) を繰り返す執拗に排除しようとする、そんな性格のことである。また権威主義的パーソナリティは「マゾ的面では権威の命令に従い、サド面では自分より弱く劣っている者を蔑視虐待することにマゾ的欲望を満足させる。」(宮古毎日新聞、2015年3月17日) という。そんなサド・マゾの性格を持った人間がファシズムを受け入れ加担した、とフロムとアドルノは言う。その典型的な具体例は、ドイツの歴史—ナチスによって顕在化した人間の一類型、ナチスの親衛隊 (*Schutzstaffel*, 略称 SS) —に見て取れる。「反ユダヤ主義者は、恐怖にとらわれた男である。それもユダヤ人に対してではなく、自分自身に対して、自分の自由に対して、孤独に対して、世界に対して、恐怖を抱いているのである。それは卑劣漢であり、しかも、自分の卑劣さを認めようとなしない。」(サルトル 1956: 60) こんな人物が身近にいたならば悲喜劇そのものであるだろう。

### 1.4 話し手の意図を見抜く言語学 — 語用論

「ハーバーマスが考える発語媒介的な戦略的行為は (...) 話し手の発言そのものには現れない話し手の隠された別の意図が目標として追及されるといった事態を意味している。」と木前 (2014: 144) は言う。<sup>6)</sup>「話し手は「明日までに仕事をやるよう君に命令する」と言明しながらも、じつは仕事を成就させることが目的ではなく、明日までにはとても実現できないような仕事を強要して、聞き手を窮地に追い込み、あわよくば彼をクビにしようという意図しているだけかもしれない。この場合、聞き手の方は、コミュニケーションにもとづく了解の達成を話し手が目指している信じ込み、了解せざるをえないなら目標追及の義務を果たさねばならないと覚悟しているのにたいし、話し手の方は、たんに了解達成の行為を装っているにすぎず、聞き手に伝えてはいない別の意図を目標として追及しているわけである。」(ibid.) と言っている。つまり、表面的には単なる「命令表現」(中川 2009) にすぎない伝達 (コミュニケーション) であっても、その裏には邪悪な話し手の思惑—聞き手を窮地に追い込みクビにしようという思惑や嫌がらせ—が潜んでいる。そん

な悪意に満ちた意図を見抜くためには語用論が有用だ。

幸いなことに歴史がわれわれに教えてくれる通り、権威主義的パーソナリティを持った連中は、あらかじめ悲劇的結末の約束された者たちだ。われわれは同じ過ちを繰り返さない。そうした連中に葬られた人々—たとえばユダヤ人—の記憶を胸に刻みつつ。それが人類のあるべき進歩のかたちであるだろう。よこしまな連中の利己的な思惑を看破するには、クールな視線と豊かな知性、なにより本質を見抜く力が重要であり、ハーバーマスや木前が指摘した「語用論的」(フィンリースン 2007: 52) 能力が欠かせない。

## 2. ドイツチュラントフнкの有用性

本節ではグローバル化の大波と権威主義的パーソナリティによるハラスメントに屈することなく「生き残る (überleben)」のに必要な語学力と豊かな知性、そしてなにより話し手の意図を見抜く語用論的能力を養うために有用であると考える学習機会を取り上げて、広範な外国語教育への応用可能性とドイツ語学習における実践例を紹介する。本論の主な対象はウェブサイトの「ドイツチュラントフнк (Deutschlandfunk、ドイツ放送)」であり、これに<sup>ま</sup>的を絞って議論する。最後には教員と学生双方に求められるべき資質についても言及することになるだろう。

### 2.1 ドイツ語専攻学生の動向と学問的関心—2018年度の3年次学生のケース

具体的考察の手がかりとして、2018年度に3年生になるドイツ語専攻の学生の動向を示すと考えられるデータの集計を表1として提示する。

言語系	19名	55.9%
歴史系	8名	23.5%
文学系	6名	17.6%
その他	1名	2.9%
計	34名	100.0%

表1 2018年度の3年次のドイツ語専攻学生の動向と学問的関心<sup>7)</sup>

この集計は、あくまで単年度の本学部ドイツ語専攻の学生の動向を示す一側面にすぎないという点をまず了解されたい。ありていに言えば、学生指導にかかる各教員間の負担の平準化を求める教員からの要望を受けて、学生自身が示した第一希望、第二希望の範囲内で、各学問領域に振り分けた結果がこの表1である。こうした事情を踏まえた上で、なお、学生たちの学問的関心の所在をあらゆる<sup>メルクマール</sup>指標として利用できるだろうと考える。この表1から読み取れるのは、言語系が55.9%と過半数を超えていること、それに歴史系の23.5%

が続いていること、そののち、文学系とその他を合わせた割合が20.5%であるといった状況だ。昨今のおおまかな印象や風評からすると、思いのほか言語系が多いように思えるものの、この集計結果が示すのは、学生たちの動向と、実際の学問的関心のありかである。これらのことから、本学の外国語学部に入学者—ここではドイツ語専攻学生—の学問的関心のベクトルは、本学部が掲げる理念（2.2節参照）に合致して、まずは言語に向いていると言ってよいだろう。

## 2.2 外国語学部の教育目標とアドミッションポリシー

わが外国語学部が掲げる目下の教育目標は「言語を通して文化を学び、文化を通して言語を学ぶ」である。またアドミッションポリシー（学生受入方針）で求められている学生像は「本国及び外国の言語、文化、社会に対する強い関心を持った人物」である。つまり外国語学部の構成員—教員と学生を問わず—にとって、言語と文化と社会は、出発点でありゴールである。これら三つの構成要素は、いわば三位一体、絶えざる相互運動にほかならず、そのうちの一つが欠けても存立しえないと言ってよいかもしれない。つまり外国語学部にとって、言語を起点に開花する多様性は、事の始まりからして欠くべからざる本質なのだ。もちろん、個々の専門性に基づく多様性が確保されねばならない。専門性なくして大学での多様性は担保されない。その上で、各領域の固有性と存在意義は尊重されねばならない。数の論理や排除の論理はわれわれには適さない。そもそも世界は多様であって、単一性には向かわないのだから。

## 3. ドイッチュラントフнкの有用性

<sup>なま</sup>生の言語情報、すなわち語学用教材として加工されていない言語情報への接近は、二十世紀の日本においては、ネイティブスピーカーに頼らぬ以外、かなり困難であった。だが二十一世紀の現在ではインターネットを通じて実に容易にアクセスできる。海外の遠隔な距離や時差、昼夜を問わず、世界的なニュースもローカルな出来事も、タイムラグなく飛び込んでくる。本論のメインターゲットである「ドイッチュラントフнк」は、ニュースに代表される報道文はもちろんのこと、政治、経済、科学、文化、社会、日常生活の諸問題をも包括する、有意義で広範なドイツ語のポータルサイトである（[www.deutschlandfunk.de](http://www.deutschlandfunk.de)）。このサイトは「ドイツ（Deutschland）」の名を冠しているものの、その守備範囲はドイツ国内にとどまらない。暴走する資本主義と移民・難民問題、地域紛争をはじめとしたテーマや、グローバル化の大波の洗礼を受け止めているヨーロッパの諸課題がよく整理され、詳しく扱われている。

ドイッチュラントフнкは総合的なドイツ語学習の機会となる。言語学习上、このサイトの最大のメリットは、広範で偏りのない記事と言語自体の品質の高さにある。優れた内

容を持つコンテンツの大部分には、ナチュラルスピードの標準ドイツ語の音声と転写テキスト（スクリプト）がついている。<sup>8)</sup> これら諸点は言語学習の途上にある者にとって計り知れぬほど大きなメリットである。テキスト種類（Textsorte）の豊かさも特筆されるべきポイントだ。話しことばの対話やインタビューなども含まれており、書きことばに限定されていない。たとえば政治家や学識者、専門家の対話、そこに見られる議論や論証の組み立て方、エレガントな話しぶりも、このサイトから学ぶことができる。それゆえ語用論の研究や談話分析（中川 2002）などの研究にも応用できる。

### 3.1 四つの記事 — パリ、イタリア、#MeToo、ウィーン

学生への外国語教育上、教員一人一人に課せられた最も重要な課題の一つは、おのれの専門分野から学生たちを啓蒙し、学生自身に内在する学習意欲をかきたてて、そののち、みずから自発的に学び続けるように促すことであるだろう。これから四つの記事を取り上げて、外国語教育におけるドイッチュラントフンクの有用性を具体的に提示する。

#### 3.1.1 パリのホームレス

たとえば「パリのホームレス—路上の家族（Obdachlosigkeit in Paris – Familien auf der Straße）」（「ヨーロッパの今（Europa heute）」、2018年1月2日）という記事がある。この中に次のような文がある：

- (1) Neben Afrikanern sind an diesem Morgen auch einige Osteuropäer gekommen: Moldawier, Albaner, Rumänen. (アフリカ人のほかに今朝、東欧人もやってきた：モルダヴィア人とアルバニア人、そしてルーマニア人が。)

昨今のヨーロッパの大都市—フランスのパリ、ドイツのミュンヘンなど—の日常をよく表すのが、その街角で見かける彼らの姿である。だが入学して間もない学生の多くは、そんな彼らの帰属や背景、その特徴について問われてもピンと来ない。そんな時こそ、教員が学生に手を差し伸べる瞬間だ。コソボ紛争とアルバニア人について、また戦後ドイツがNATO軍の一員として行った初の空爆について、学生たちに説明すべきだろう。こうした記事から、ヨーロッパの抱える問題と、現状認識へとつなぐことができる。このような外国語教育が、複雑な世界の実情に迫る一歩となるだろう。

#### 3.1.2 イタリアの食と産地表示

学生たちにとっつきやすい記事もある。それは身近でグローバルな食に関する話題である。ここに描かれた食の状況は現代日本のそれにも似ている。その記事は「食品の産地

表示— パスタをめぐる笑劇 (Lebensmittel-Kennzeichnungen – Posse um die Pasta)」(2018年1月3日)である。

- (2) Das Essen hat in Italien traditionell einen hohen Stellenwert. (...) Und die Mehrheit der italienischen Bevölkerung will wissen, was in den Lebensmitteln steckt, die im Supermarkt verkauft werden und woher sie stammen. (イタリアの食は伝統的にステータスが高い。(...) イタリア人の多くは知りたがっている、スーパーで売られている食品に何が含まれるのか、産地はどこなのか。)

食通の国、おいしいイタリア料理。スーパーの買い物客は品物を手に取り品定め。「フランス産の牛肉は、いいえ結構 (Rinderfilet aus Frankreich, nein danke.)」。イタリア人の食に対する自信と誇り。農場主は言う、「われわれはイタリアのアイデンティティの一部なのです。(Wir sind Teil der italienischen Identität.)」と。だが「イタリア食品メーカーのトマト缶に一部、中国産が混入されていたことが判明すると、大きな怒りが沸き起こった (Als bekannt wurde, dass Dosentomaten italienischer Hersteller teilweise mit Tomaten aus China gestreckt wurden, war die Empörung groß.)」。日本でも、農産物のブランド化や産地偽装、農薬汚染について、よく取り沙汰される。こうした食の話題は、学生たちにとっても日常的で身近であるだろう。

### 3.1.3 #MeTooとシモーヌ・ド・ボーヴォワール

次の記事「シモーヌ・ド・ボーヴォワールについて—彼女のおかげで私たちはタブーのテーマを話し合える」(Über Simone de Beauvoir – „Dank ihr können wir heute über Tabuthemen reden“)」(2018年1月4日)は現在進行中の最も重要なテーマの一つである。

- (3) „Ihre Gedanken sind heute noch wahnsinnig aktuell.“ (「彼女の思想は今でもすごくアクチュアルなんです。)」

現代日本においてTwitterのハッシュタグ「#MeToo (私も)」のことを知らぬ学生はまづいないだろう。<sup>9)</sup>たとえ知らずとも、手もとにある携帯端末を使って即座に検索し事情を把握することができる。たとえば、朝日新聞の特集記事に「「#MeToo」どう考える?」ということばが見出しを飾る(2018年1月21日付朝刊第9面)。その内容は「俳優として活動していた高校2年生の時、プロデューサーから「2人で打ち上げをしよう」と言われ、食事の後でカラオケ店の個室に連れていかれ、被害に遭いました。」というものである。この#MeToo現象は、従来、闇から闇へ葬られてきたセクハラ告白であり、SNSを通じ



て世界中で同時進行的に沸き起こった告発のムーブメントである。この動向に重要な視点を与え、今もなお大きな影響力を持ち続けているのが、この見出しを飾るフランスの思想家、シモーヌ・ド・ボーヴォワールである。<sup>10)</sup>

(4) *On ne naît pas femme: on le devient.* (人は女に生まれるのではない、女になるのだ。)

(ボーヴォワール 2001 II : 12)

このことばで有名な彼女のことをよく知る学生は今やあまり多くはないかもしれない。しかし現代社会と文化の進展と動向—とりわけ女性解放 (*die Emanzipation der Frau*)—を深く把握するためには、間違いなく、ハンナ・アーレントと並んで欠くことのできない重要人物の一人である。<sup>11)</sup> このドイッチュラントフンクの記事を契機として、彼女たちが懸命に取り組んだ思想に肉迫することができる。

#### 3.1.4 オーストリア・ウィーンにおける抗議デモ

本論の最後の例として取り上げるのは「中道右派政権に抗議するウィーンのデモ (*Demo gegen rechtskonservative Regierung in Wien*)」(2018年1月14日)というタイトルを掲げる記事である。この中には「中道右派 (*rechtskonservativ*)」という語彙の出現が見てとれる。

続くリード文には、何に対する抗議デモなのか、そしてその規模について、ごく中立的に記述されている。

(5) *In Wien haben zehntausende Menschen gegen die Politik der neuen österreichischen Regierung protestiert.* (ウィーンでは新政府の政策に抗議して、数万人規模のデモが行われた。)

だがこれに続く記事の本文にはより一層、意味明示的な語彙が連続して登場する。

(6) *Sie werfen der Koalition aus ÖVP und FPÖ rassistische, rechtsextreme und neofaschistische Tendenzen vor.* (デモの参加者たちは、国民党と自由党による連立政権の、人種差別的、極右的、ネオファシスト的傾向を非難した。)<sup>12)</sup>

ここにはもはや、先の例文(5)に見られた中立的なニュアンスの語彙である「中道右派」ではなくて、次の三つの語彙、すなわち「人種差別的 (*rassistisch*)」、「極右的 (*rechtsextrem*)」、「ネオファシスト的 (*neofaschistisch*)」が相次いで表現されることによって、事の危機的な実態が、よりよく表現されている。移民・難民・外国人の排斥運動がヨー

ロッパ各地に起こる中、ウィーン市民によるこうした動きは、われわれ外国人にとって、いくらか心強い。

日本のNHKは、これと同じ出来事を“News Web”の記事として、次のように報じている。

(7)「ナチス思想の復活許すな」オーストリアで2万人が反政府デモ

オーストリアでは、難民・移民の受け入れに否定的な政策を掲げた中道右派と極右の二つの政党が先月、連立政権を発足させましたが、これに対して2万人を超える市民が13日、ウィーンでデモを行い、「ナチスの思想の復活を許すな」などと批判の声を上げました。オーストリアでは、去年10月の議会選挙で、EU＝ヨーロッパ連合の難民政策の見直しを掲げる中道右派の「国民党」が国民からの支持を集めて勝利し、極右政党「自由党」との連立政権を先月発足させました。これに対しオーストリア各地から集まった2万人を超える市民が13日、ウィーンで反政府デモを行い、「ナチスの思想の復活を許すな」などと批判の声を上げながら行進しました。参加した市民は、連立政権が難民・移民への補助金や失業者に対する手当など社会の弱者の支援を削減する方針を打ち出したことに強い危機感を示していて、40代の女性は「社会を分断させる政治だ」と話したほか、40代の男性は「右傾化を食い止めるには声を上げるしかない」と話していました。また、極右政党の幹部で、内相を務めるキックル氏が「難民・移民を1か所に集中させて収容するべきだ」などと、ナチス・ドイツの強制収容所を連想させるような発言をしたことを強く非難する市民もいました。ウィーンで、これほど大規模な反政府のデモが行われるのは異例で、政権に対する市民の強い不信感が現れたかたちとなっています。

(NHK, 2018年1月14日)

この出来事に象徴される動向を知らずして今や世界を語ることはできない、と言っても過言ではない。現在の最もアクチュアルなテーマの一つは、アメリカ・トランプ大統領に象徴される右傾化、ポピュリズム、ナショナリズム、白人至上主義であるだろう。「もしユダヤ人が存在しなかったら、反ユダヤ主義者たちは、それに代わるものを作りあげたろう」し、「他の国においては、それが黒人であったり、黄色人種であったりする」(サルトル 1956: ii)。これらの問題は、多様性を是とする大学内では比較的 safely に議論できるかもしれないが、現地において不用意に語るなら、大きな危険が生じる点にもわれわれは十二分に注意を払わねばならない。この問題はそのような微妙で扱いの難しいテーマでもある。留学先でわれわれは地元の人たちの親切に触れて心動かされた経験も少なくない。この事実を十分承知した上で負の側面も認識する。授業において関連する事柄やその背景

に言及すると、時代が放つ雰囲気鋭敏な若者たちは目を輝かせて食らいつく。その積極的な姿勢は実に印象的である。かくのごとき世界同時進行中の情勢を、外国語を学ぶことを通じて学生たちに伝え、共有し、議論し、そして冷静に考察する。これこそ、外国語学部の構成員に課せられた使命の一つであるに違いない。

ドイッチュラントフンクから具体的に四つの記事を取り上げて、これを活用した外国語教育の実践可能性を考察した。初級レベルを終えた学生には、こうした機会を教材として使うことで彼らの知的好奇心は刺激され動機付けられる。その結果、高度な言語能力とともに冷静で知的な批判的精神を養うことができるだろう。その学習途上で、単一な世界よりも多様な世界の方が本質的で意義深い、ということにも気づくのではなからうか。少なくとも教員は学生たちにそのきっかけを与えることはできるはずである。

#### 4. おわりに — 外国語学部の教員と学生に求められる資質

外国語学部は世界の縮図である。この総合体は各専攻によって構成されている。多様な言語と専門分野は世界の実情を把握するために不可欠で相補的な存在だ。言語を起点として世界中の文化と社会の核心に向かって進まねばならない。強靱な人文知は不断の努力を通じて涵養される。外国語学部に関わる者たちは、母語はもちろん、その他の言語や文化、社会に対する興味や関心、好奇心と情熱を基盤とする自発性と積極性を有している。この共通基盤に基づいて、各自、一点を穿つ専門性と広範な知的総合力を養い続ける。<sup>13)</sup>

大学は学問分野すなわち専門なしに存在できない。各学問分野は人類の長い歩みの中で培われてきた。各教員はおのれの学問分野のエキスパートであるという自負がある。通り一遍の語学教育、観光情報の提供、お茶の間談義、ゴシップのたぐいに終始して、事足りるような牧歌的時代は過ぎ去った。象牙の塔に閉じこもっていればよかった時代も過ぎ去った。それぞれが率先して「自国及び外国の言語、文化、社会に対する強い関心を持って」(2.2節参照) 研鑽を積み重ねねばならないし、それなくして生き残れない。十分な専門性と知見に基づいた教育と研究が必要である。

各教員は学生たちを固定観念から解放し視野を拡大させるべく、多方面からの知的刺激を与えなければならない。学生も受け身の姿勢ではなく、みずからの意志に基づいて自律的かつ積極的におのれの専門性と総合力を養う必要がある。主体的な学習がなければ、いかなる教材、教授法も無意味となる。学生たちの多くは、大学卒業後、実業界—たとえば自動車関連産業や航空産業、メーカー、金融、外資系—へと羽ばたくが、在学中に、まだ気づかぬ世界の豊かさに気づかせて、彼らのうちにひそむ潜在力を引き出すように手助けしてやらねばならない。そのためには、表現力、聴取力、読解力の修得が欠かせない。これに加えて、語彙力、文法力、背景的知識の充実と向上も、学生にとって必須の要件だが、昨今、意外に見落とされやすい事柄である。

押しとどめようのないグローバル化の大波、それに対する不安と恐怖に苦悩する世界。そんな現在だからこそ世界の多様性の意義を再認識しなければならない。われわれはドイッチュラントフンクを通じて洗練された言語情報を得ることができるし、遅滞なく最新の世界情勢にアクセスできる。世界の動向を把握するためにドイッチュラントフンクは最適な情報源の一つであると言ってよいだろう。

同時に、ドイッチュラントフンクを外国語教育に活用することで、批判的でありながら寛容な知性を養うことができる。これにより、異質な者や弱者、マイノリティ、移民や外国人を排斥しようとする画策する暴力に屈せぬための真の力を養うことができる。おのれが抱える弱さや不安感、コンプレックスを隠蔽するために、自分とは異なる他者や弱者の排斥に躍起になる権威主義的パーソナリティを持った人物になるのではなく、「差異に対する感受性が維持できる」(ハーバーマス 2010: 120) 寛容で力強い多文化主義の教養人になるための有用性をドイッチュラントフンクは有している。

以上、外国語教育の観点からドイッチュラントフンクが持つ数々の効用について考察した。このほかにも優れた情報源が複数存在するが、その応用可能性についてはまた別の機会に論じたい。

## 注

- 1) 大言語と小言語という見方は相対的なものである。スイス・ドイツ語圏のマイノリティ言語—たとえばレト・ロマン語—の言語文化に関心を寄せる者にとってドイツ語はほかならぬ大言語である(中川 2017)。だがグローバルな視点で見れば大言語は英語であり、ドイツ語は周辺に追いやられつつある小言語であるとも見ることもできる。
- 2) ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905年生、1980年没) は『文学とは何か (*Qu'est-ce que la littérature?*)』(1948年)において「アンガージュマン (社会参加) の文学」を提唱した。3.1.3節で取り上げるボーヴォワール (注9参照) はサルトルの生涯のパートナーだった。
- 3) アルベール・メンミ (Albert Memmi, 1920年生) は、フランス植民下のアフリカ・チュニジアのチュニスにて馬具職人の子として生まれたユダヤ人。1966年にパリ大学の社会心理学の教授となる。自らの体験をもとに差別と抑圧の問題をめぐる小説、評論を多数発表している。
- 4) エーリヒ・フロム (Erich Fromm, 1900年生、1980年没) の代表作『自由からの逃走 (*Escape from Freedom*)』(1941年) は亡命先のアメリカにて執筆された。ヒトラーの権威に従いその犠牲になることに喜びを感じる一方で、他方では自分より劣った者—たとえばユダヤ人—を蔑視・虐待し、欲求不満や劣等感を解消しようとした心理や行動のあらわれを見事に描き出している。
- 5) テオドル・アドルノ (Theodor Adorno, 1903年生、1969年没) は「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である。」(アドルノ 1996) と語った。フランクフルト学派 (Frankfurter Schule) の主導的存在。
- 6) ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas, 1929年生) は1956年にアドルノの助手を務めた。フランクフルト学派第二世代の代表者であると同時に現代ドイツの代表的思想家・哲学者である。
- 7) 表1における学問領域の一つである言語学系には、文法論、類型論などの理論言語学、音声学、

- 社会言語学、語用論、談話分析、コーパス言語学と、これらを応用した外国語教授法が含まれる。
- 8) ただし転写する時間的余裕のないニュースや、社会的に微妙なテーマ、長時間に及ぶ文化的テーマでは転写テキストが付されていないことがある。3.1.4節のウィーンの記事はその一例。
  - 9) 女性が過去に芸能界で受けたセクハラや性的被害を告白したことをきっかけに、それに立ち向かう動きが、SNSのTwitterとそのハッシュタグ (#) の機能を利用して世界中に広がっている。
  - 10) シモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir, 1908年生、1986年没) は、『第二の性 (*Le Deuxième Sexe*)』(1949年)において、女性という存在が社会と文化によってつくられたものであることを豊富な実例と歴史や精神分析の資料を用いて立証し、後の女性解放運動の思想的原点となった。妊娠中絶の合法化にも尽力した。
  - 11) ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906年生、1975年没) はドイツ出身のユダヤ人。のちに米国に亡命し、1951年にアメリカ国籍を得る。主著は『全体主義の起源 (*The Origins of Totalitarianism*)』(1951年)。アーレントは、親衛隊 (SS) の中佐としてホロコーストに関与したアドルフ・アイヒマン (Adolf Eichmann, 1906年生、1962年没) の裁判記録『エルサレムのアイヒマン (*Eichmann in Jerusalem*)』(1963年)の中で、ナチスのユダヤ人迫害という悪は根源的・悪魔的なものではなく、思考や判断を停止し外的規範に盲従した人々によって行われた陳腐なもの、つまり「凡庸な悪 (*the Banality of Evil*)」であり、ありふれた悪だからこそ社会に蔓延し世界を荒廃させようと述べた。
  - 12) ÖVPは「オーストリア国民党 (*Österreichische Volkspartei*)」の略称、FPÖは「オーストリア自由党 (*Freiheitliche Partei Österreichs*)」の略称である。
  - 13) 筆者の専門分野はドイツ語学であるが、学部時代に有していた過剰なエネルギーと好奇心の赴くままに数多くの学問分野を学んだ結果、副次的にドイツ語の中高の専修教員免許状、英語の中高の一種教員免許状、社会の中高の一種教員免許状も取得するに至った。これら三種の中高教員免許の所有は現在の大学教員としてはユニークであるかもしれない。だが平成21年4月に教員免許更新制の導入以降、いずれも更新が必要な状態にある。

## 参考文献

アドルノ テオドール

1980 『権威主義的パーソナリティ』(現代社会学体系12), 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳, 青木書店

(Adorno, Theodor, *The Authoritarian Personality*, 1950)

1996 『プリズメン—文化批判と社会』, 渡辺祐邦・三原弟平訳, ちくま学芸文庫

(*Prismen, Kulturkritik und Gesellschaft*, 1955)

ヴィヴィオルカ ミシェル

2009 『差異—アイデンティティと文化の政治学』(サビエンティア09), 宮島喬・森千香子訳, 法政大学出版局

(Wieviorca, Michel, *La différence - Identités culturelles: enjeux, débats et politiques* 2001; 2005)

木前 利秋

2014 『理性の行方—ハーバーマスと批判理論』, 未来社

サルトル ジャン＝ポール

- 1956 『ユダヤ人』, 安堂信也訳, 岩波新書.  
(Sartre, Jean-Paul, *Réflexions sur la question juive*, 1946; 1954)

中川 裕之

- 2002 「インターネットで聞くドイツのラジオ放送—「WDR5-Morgenecho」を資料とする談話分析の試み」, 大阪外国語大学『大阪外大情報処理センターと情報処理教育の可能性』, 33-43  
2009 「命令表現の日独語対照研究」, 大阪大学言語文化研究科『言語文化研究』第35巻, 199-219  
2017 「多言語グラウビュンデンのレト・ロマン語方言の書きことば成立の歴史—識字教育につながる聖書翻訳とその文学的開花例としての抒情詩」, スイス文学会編『スイス文学・芸術論集 小さな国の多様な世界』, 57-88, 鳥影社

ハーバーマス ユルゲン

- 2010 『ああ、ヨーロッパ』, 三島憲一・鈴木直・大貫敦子訳, 岩波書店  
(Habermas, Jürgen, *Ach, Europa*, 2008)

フィンリースン ジェームズ・ゴードン

- 2007 『ハーバーマス』(〈1冊でわかる〉シリーズ), 村岡晋一訳, 岩波書店  
(Finlayson, James Gordon, *HABERMAS: A Very Short Introduction*, 2005)

フロム エーリッヒ

- 1952 『自由からの逃走 新版』, 日高六郎訳, 東京創元社  
(Fromm, Erich, *Escape from Freedom*, 1941)

ボーヴォワール シモーヌ・ド

- 2001 『決定版 第二の性 I, II, III』, 『第二の性』を原文で読み直す会訳, 新潮文庫  
(Beauvoir, Simone de, *Le Deuxième Sexe*, 1949)

メンミ アルベール

- 1996 『人種差別』(りぶらりあ選書), 菊池昌実・白井成雄訳, 法政大学出版局  
(Memmi, Albert, *Le racisme*, 1982)

本研究はJSPS 科研費JP15K02750の助成を受けたものです。

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP15K02750.